

2020 年 6 月 21 日（日）「神から離れた『幸せ』の空しさ」

《聖書協会共同訳》コヘレト 2:24-26

24 食べて飲み、労苦の内に幸せを見いだす。これ以外に人に幸せはない。それもまた、神の手から与えられるものと分かった。
25 この私のほかに誰が食べ、誰が楽しむというのだろうか。
26 なぜなら、神は御心に適う人に知恵と知識と喜びを与える。しかし、罪人には集め、積み上げることを務めとし、それを御心に適う人に与えてしまうからだ。これもまた空であり、風を追うようなことである。

《新改訳 2017》伝道者の書 2:24-26

24 人には、食べたり飲んだりして、自分の労苦に満足を見出すことよりほかに、何も良いことがない。そのようにすることもまた、神の御手によることであると分かった。
25 実に、神から離れて、だれが食べ、だれが楽しむことができるだろうか。
26 なぜなら神は、ご自分が良しとする人には知恵と知識と喜びを与え、罪人には、神が良しとする人に渡すために、集めて蓄える仕事を与えられるからだ。これもまた空しく、風を追うようなものだ。

【序論】

今日で2章が終わります。24～26 節という短い箇所を扱うことになりますが、前回の箇所（2:18-23）から切り離したのは理由がありました（当初はまとめて扱う予定でしたが、途中で分けるべきだと判断しました）。それは、今日の箇所から本書は新しい方向に向かって進み始めるからです。相変わらず虚無的な結論が置かれてはいるものの、神の存在がちらほらと見え始めるのです。^{もっと}尤も、1:13 で一度だけ「神」は登場していましたが、そこでは「これは神が、人の子らに与えて労苦させるつらい務めであった」と言われていて、「人の労苦の原因者」として無機質に説明されていただけです。今日の箇所に登場する「神」も、説明のされ方はさほど変わりませんが、より具体的に言うならば、ここでは「飲食と労働の喜びを人間に許容する方」「不幸な労働の背後にいる方」とされています。相変わらず、「神」に対して前向きとは言い難いイメージが置かれていることが分かるでしょう。この箇所を真に理解するためには、コヘレトがどういう立ち位置でこれを語っているかを読み取らなくてはなりません。彼は、著者としては「神を知る人」であるのですが、一読者としては「まだ神をよく知らない人」「何となく神が存在するということが分かってきた人」のところに身を置こうとしているのです。その神が背後で行なっていることを、敢えて皮肉を込めて語っていきます。

【本論】

本論 1. 飲食・労苦の喜び

食べて飲み、労苦の内に幸せを見いだす。これ以外に人に幸せはない。それもまた、神の手から与えられるものと分かった。(2:24)

ここには、人間の日常生活における三つの基本的な営みが出てきます。「食べる」「飲む」「働く」です。ここでコヘレトは、飲食について結構な評価をしています。贅沢三昧をしたソロモンの経験が背景にあるとはいえ、人間にとって食べることは生きていくうえでの最優先事項です。「生きる」ということを「食っていく」と言い換えられもします。食べなくては人は生きられず、活動するための力を得ることもできません。

現代日本人は一日三食が普通になっていますが、(一つの説としてお聞きください)「ナチュラルハイジーン」という考え方によると、朝から昼は排泄の時間、昼から夜は摂取と消化の時間、夜から朝は吸収と利用の時間と区分され、朝はそんなに食べなくてもよいと言われます。その考え方を知ってから、私は朝は豆腐など消化によいもの+α程度にするようになったのですが、10時半くらいになると空腹感を覚えてくるようになります。ついでに言うと頭が冴えてきます。そういう生活に変える前は、空腹感を感じることも自体が少なかったのですが、この習慣によって「食べる」ということのありがたさが身に滲みるようになりました。空腹を我慢した後の昼食というのは、この上ない幸福感をもたらします。

コヘレトも「食べる」ことの重要性をよく知っていました。人は腹が満たされていないと、それ以外のことを楽しむ余裕が持てないのです(衣食足りて礼節を知る)。三度の飯より好きなこともあるかもしれませんが、それは生きていくうえで必要な食事が摂れるという前提の話でしょう。この点において「飲む」ことも同様です。飲食も、ただ腹を満たすに留まらず、人類は「美味しいもの」を求めるようになりました。味覚において幸せを感じ、腹が満たされることでも幸福を味わう。適度な量を食べれば幸せであり、消化・吸収・排泄され、また食べたくなる。このサイクルを繰り返しながら、ただ「腹に入れる」だけの行為ではなく、「美食」を楽しむ生き方へと進んだのです。動物のように掻っ食らうというわけではありません。

コヘレトは「労苦」についてもそこに幸せを見出さうるものだと語っています。労働は「食べる」ことを第一の目的としつつ、前回も申しましたように「インフラ、交際、教育、医療、趣味、レジャー、保険、自動車、税金、生活必需品の購入」などの必要経費を稼ぐための手段です。職種は多岐に亘りますが、人間は仕事にやり甲斐を見出して

いくことができます。つらい仕事があることは承知の上で申し上げますが、自分が社会の役に立っていることを実感するとき、人はその仕事に幸福感を覚えるようになるでしょう。仕事を通して成長し、何かを発見し、誰かに喜ばれる。それは人間が社会的存在であるがゆえに感じる喜びとすることができます。

本論 2. 神から離れて

しかし、24 節後半を読むと、コヘレトの言い方が少々引っかかってくるのです。「これ以外に人に幸せはない。それもまた、神の手から与えられるものと分かった」。コヘレトは確かに、飲食も労働も神から来るものだという認識を持てはいるのですが、「**これ以外に人に幸せはない**」という言い方は、何か嫌々ながらと言いますか、仕方なく受け入れているというような、運命に逆らうことのできない「熱意なき承認」という感じがいたします。人は料理を食べて「美味しい、おいしい」と笑顔になり、労働をして「何てやり甲斐のある仕事なんだ」と生き生きとした表情をするのですが、コヘレトはそれらの行為はすべて神のコントロールの下で行なわれているに過ぎないと言うのです。神が人間を、食べなければ生きられない存在として造り、働かなければ食を得られない社会とされた。だから、人間は喜んではいるけれど、その喜びは突き詰めれば自分のものではない。神の許しがあってこそその喜びだという悟りに至ったのです。

クリスチャンなら「その何が問題なのだ」と言うかもしれません。「神がお与えくださったものを素直に喜んだらいいじゃないか」と。しかし、コヘレトは敢えて神から離れた価値観に立って物を言っているのです。「あれ？よく考えてみると、俺の人生って、何かにコントロールされているだけじゃないのか？」ということに気づいたときに生じる、ある種の「自律性の破綻」と言えるでしょう。人間は自分の意志によっては空腹感ひとつなくすることができず、生まれることも死ぬことも受動的に受け入れるしかない存在である。次の 25 節はこのことを理解するうえで重要な部分になります。

この私のほかに誰が食べ、誰が楽しむというのだろうか。(2:25)

本節はいくつかの訳を読み比べてみると、結構大きな違いがあることが分かります。

- ・ **実に、神から離れて、だれが食べ、だれが楽しむことができるだろうか。**(新改訳2017)
- ・ **神によらずに、誰が食べたり、誰が楽しんだりできようか。**(フランシスコ会訳)

マソラ本文¹に基づく原文を見ると、25 節の最後は「**מִי יֵאָכֵל מִי יִשְׂמֵחַ**」(フーツ・ミンメンニー)

¹ マソラ本文

マソラ学者たちが旧約聖書のマソラ (伝承) を収集し整えたヘブル語旧約聖書本文。7-11 世紀にかけて完成したと言われる。

であり、直訳すると「私から離れて」となります。聖書協会共同訳はこれに従って「私のほかに」と訳しているのですが、前節とのつながりを考えると意味が通りにくくなります。多くの注解者がこの翻訳に異議を唱えており、「フーツ・ミンメンヌー」とされているシリア写本、いくつかのヘブル語写本、七十人訳などに従って「彼（つまり神）から離れて」と訳しています。実際、「彼（神）から離れて」とした方が意味は通りやすいでしょう。人は神から離れては何もできない存在である。なぜなら、神の許しの下に人生を喜ぶことができているのだから。それなら、むしろ神に感謝して生きようではないか。そんなメッセージが響いてまいります。続く 26 節を理解するためにも、25 節をどう訳すかは重要なのです。

本論 3. 働きの実が奪われるという空しさ

なぜなら、神は御心に適う人に知恵と知識と喜びを与える。しかし、罪人には集め、積み上げることを務めとし、それを御心に適う人に与えてしまうからだ。（2:26a）

ここに「御心に適う人」と「罪人」という二種類の人々が出てきます。これをどう解釈するかは簡単ではありませんが、これまでの話の流れからすると「神に感謝する人」と「感謝しない人」と理解するとスムーズに話が進むでしょう。神は人の心を知っておられ、神への感謝をもって生きている人を祝福し、感謝なく生きている人が蓄えたものをもってその人を養うということをしておられるというのです。これは、この世の不条理の一面と言えるかもしれません。2:18-23 で語られていた内容を思い出してみると、ソロモンが莫大なエネルギーを費やして築き上げた富が、自分の代が終わると誰かの手に渡ってしまうという皮肉と重なってまいります。貰い受ける人が「知恵ある者」か「愚かな者」かは分かりませんが、どちらにしても自分は「誰かさん」の利益になるためにがんばっていたに過ぎないという結論に至る。

ここで重要なことは、コヘレトが自分を「神の御心に適わない人」「神に感謝をささげない人」の位置に身を置いて語っているということです。つまり、もし自分が神から離れて生きたとしたならば、その働きの実は吸い取られるように誰かのものになってしまい、手からすり抜けていったもののために悔しさと絶望のどん底に突き落とされることになる。これが「自分のことしか考えない人間」の行き着く先だと言うのです。

これもまた空であり、風を追うようなことである。（2:26b）

「風を追うようなこと」という表現も本書に繰り返し出てきますが、「追う」と訳されたヘブル語は「(羊などを) 飼う」と同じ動詞であり、風を飼うことの難しさ、その不可能

性を言い表しています。つまり、神から離れて生きる人の終着点は、せっかく地上で蓄えたものもスルスルと抜けて行ってしまう「空しいもの」となるのだということが言われているのです。

そこで、裏のメッセージが聞こえてくることになる。では、神に結びついて生きてみてはどうだ。すべてのことを神に感謝してみては？神はその人にすべての良きものをお与えになるのではないか。

【結論】

この箇所ではコヘレトが何を言っているのかを理解するのに苦労しました。読者は、コヘレトが真っ直ぐにはモノを語っていないということを十分に理解する必要があるでしょう。彼の言っていることを文字通りに読めばいいということではありません。彼が「神から離れて生きたらどういうことになるか」という観点で、しかもその位置に自分を置いて物事を考え、読者に伝えているということを読み取る必要があるのです。そして、その上で裏側に隠されたメッセージを聞き取っていく。コヘレトの言葉を読み解くうえで、このようなやや手間のかかる作業が必要になります。

だから、食べるにも、飲むにも、何をするにも、すべて神の栄光を現すためにしなさい。

(I コリント 10:31)

この聖句の意味も、コヘレトのひねくれたメッセージを通してよく理解できるようになるのではないのでしょうか。

【祈り】

養い主なる天の父なる神様。あなたはご自分に感謝をささげて生きる人に、ご自身の豊かな資源から生きるために必要なすべてのものを与えてくださいます。世界に満ちるすべてはあなたのものです。私たちは、自分のものを自分のものとして握りしめ続けたという欲求に駆られますが、その手を開き、あなたの養いに身を委ねます。そして、そのすべての営みに感謝を加えます。生かされていることそのものを感謝し、飲食も労働も、すべてはあなたが「良きもの」として私たちに備えてくださったものだとして受け止め、御名を崇めます。私たちの生活そのものが礼拝となり、神の恵みを喜び楽しむ人生を全うすることができますように。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

すべての良きものをもって、生きとし生けるものを養い給う、父なる神の愛、

「我らの日用の糧を今日も与えたまえ」と祈ることを教え、飲食と労働の重要性を認め
給いし、主イエス・キリストの恵み、

神の恵みを喜び楽しむ人生を全うさせ給う、聖霊の親しき交わりが、

あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。